

自産自消ができる国へ vol.82

『農業ロボットとオーガニック』

文 西辻 一真 text by Kazuma Nishitsuji

先日、ベトナムの農業ベンチャー企業の方に会ったのですが、非常に画期的な技術を開発していたのでご紹介いたします。その企業はオーガニック農業が

アジアで広まらない理由のひとつとして、欧米に比べて高温多湿で病害虫の発生が多くあるため、それらへの手間がかかり高コストで生産をしなければいけないということがあります、それを解決するために活動を始めたそうです。実際に日本国内も同様で0・2%の耕地面積しかオーガニックを取り入れておらず、栽培方法が従来の農法に比べて難しいことが課題になっています。

ただ日本の場合、生産者や消費者、流通業者がオーガニックと慣行栽培の二項対立を考えるため、どうしてもどちらが悪というような捉え方をしてしまうことも問題であり、消費者に「おいしい野菜」を提供することに集中して、消費者の「おいしい」票を集めたら広がるだけなのに蹴落としあいをしてしまいます。

話を戻しますが、その農業ベンチャーが何を作っているかという「ミニ四駆の前にほうきがついたもの」という



Profile
82年、福井県生まれ。京都大学農学部卒。広告会社に勤務後、07年9月にマイファームを設立。都市部の耕作放棄地を体験農園として貸し出すビジネスを始める。

株式会社マイファームの取り組みはこちら
公式サイト: <http://myfarm.co.jp/>
フェイスブック: <https://www.facebook.com/myfarm.koto>
耕作放棄地を再生させる『体験農園マイファーム』: <http://myfarmer.jp/>
耕作放棄地を耕す人を育てる『アグリイノベーション大学校』
<https://agri-innovation.jp/>

ITや最新の技術からかけ離れたもので、小学生でも作れそうなものでした。私も最初はどうやって使うんだろう？ と思っていたらなんとこれを生産している圃場の畝間（うねとうねの間の溝）

芽せずに畝間の除草の手間が省けてオーガニック栽培が一步簡単になったということ。今年から日本にセールスをかけると言っていました。

に走らせるそうです。ヒントはゴルフ場の芝生らしく、みんなが歩く場所には芝生の育ちが悪く、誰も歩いてないところは均一に育つところから踏み固めたり振動させたりしていれば発芽しないのではないかと推測から構想がスタートしたそうです。これこそベンチャー魂！と感動して聞いていたのですが、さらにそこからベトナムの農業でも導入できるように、安く畝間を動くように、ということを考えていたらミニ四駆にたどり着いてテストをしたそうです。その結果、実際に発

このように目の前の事象を仕組みで解決しようとするような農業ベンチャーがどんどん世界中で出てくれば、大規模なAIやロボットの導入の前にイノベーションが起こるのではないかと久しぶりにワクワクしました。どうしても農業界にいと目の前の課題をその時だけで解決しようとする考え方がはびこりすぎていて仕組みの改善につながらないことが多いので、マイファームも引き続き、仕組みの改善を行っていかうと気持ちを新たに持ち直しました。井の中の蛙にならないように頑張ります。